

取出して、是こそ朝夕にかほをうつしつれ、見ん度に、義經をみると思ひてみたまへとてたびにけり、是給りて今なき人の様に、むねにあて、ぞこがれける、泪の隙よりかくぞ詠じける、

見るとても嬉しくもなしますか、みこひしき人の影をとめねば略下

〔假名手本忠臣藏 第六〕由良之助釣燈籠の灯を照し、讀む長文は御臺より、敵の様子細々と、女の文の跡や先略中 おかるは上より見おろせど、夜眼遠眼なり、字性もおほる、思ひ付たる延べ鏡出して寫して讀取文章略下

〔歷世女裝考一〕柄鏡

本朝のむかしは、貴賤とも髪は垂しゆる、合せ鏡する事はなかりしならん、西土は太古より髪を取あげゆひて、其狀の名さへあまたあれば、合せかゝみもまづらん、

〔歷世女裝考一〕懷中鏡

今ある古鏡の小なるは、むかしの懷中鏡なるべし、まかおもふよしは、むかしのよしある女は、今のごとく、ものまうでのさきにて、まかほつくる事、古書に散見されば、懷にかゝみもちつらん、和泉式部集下の人のおきたりけるかゝみのはこをかへしやるとて、かげだにもとまらざりけり、

ます鏡はこのかぎりはいふかひもなし、これは男のおきわすれたるかゝみをかへす歌なり、わすれしとあれば懷中鏡なるべし、男もくわいちゆうかゝみもてば、女はさら也、又枕のさうし吟季

本卷きよげなる人の、よるは風のさはぎにねさめつれば、ひさしうねおきたるまゝに、かゝみうちみて、これは大内の女房宿直の時のさまなれば、手近く鏡臺などあるべきやうなし、枕のもと

におきし懷中鏡にやありけんかし、後の物にみえたる中に、玉海略註 建久二年六月の條に、鼻紙の間に鏡をいれて持事みえたり、これらを徴とすれば、古き小鏡は懷中鏡なるべし、

〔枕草子二〕こゝろときめきするもの